カナダにおける第二次世界大戦前の移民の日系エスニシティ形成の一考察

“A Study on the Formation of Japanese Ethnicity among Pre-WWII Immigrants in Canada”

浦田　葉子　URATA YOKO

概　要

移民世代の語りから日系エスニシティ形成のプロセスを探る。カナダに第二次世界大戦前に移民した一世への 1971-1972 年のインタビューの記録を、移民個人が置かれた状況と他者との相互関係に注目し、分析した。

キーワード

日系
エスニシティ
カナダ
移民

目　次

1　はじめに
2　日系エスニシティ
2.1　エスニシティ研究
2.2　日系カナダ人概要
2.3　日系カナダ人研究
3　資料
3.1　準備調査票
3.2　調査と資料
3.3　調査が行われた時代
4　移民世代の語り
4.1　渡加の理由
4.2　連邦政府、州政府による差別
4.3　凝集
4.4　分離分裂
4.5　他集団の一員との接触
5　おわりに

1　はじめに

カナダの日系エスニシティはどのような状況でどのように形成されたか。この問いに答えるため、第二次世界大戦前の移民の語りから、個人が置かれた状況と他者との相互作用に注目し、日系エスニシティ形成のプロセスを探る。本研究では、1971年と1972年に行われた移民世代へのインタビュー筆記記録の分析を行う。当時、インタビューは「差別」をテー

マに行われたが、本研究ではエスニシティの視点から資料を再分析する。

2　日系エスニシティ

2.1　エスニシティ研究

エスニシティは社会現象を説明する概念として用いられてきた。移民の流入が多い国では、人は人種・民族間の問題に否応無しにさらされる。エスニシティの概念は、多様なエスニック集団を抱え、社会統合を目指す北アメリカ社会（アメリカ合衆国とカナダ）における社会科学の分野で頻繁に用いられてきた。

しかし、エスニシティの定義は統一されているわけではなかった。ゼボルドW．イサジフは、1974年に「さまざまなエスニシティ定義」で、主に北アメリカのエスニック集団を扱った研究を取り上げ、そのエスニシティの定義を分析した。研究の中では、次の要素の内一つあるいは複数の組み合わせが、エスニック集団の属性として取り上げられている。まさに「さまざまな」定義が存在したのである。

共通の国あるいは地域の出身あるいは共通の祖先、同一文化あるいは慣習、宗教、人種あるいは身体的特徴、言語、同類意識、ゲマインシャフト的諸関係、共通の価値観あるいはエトス、独自の制度、少数派ないし従属的地位あるいは多数派ないし支配的地位、移民集団（イサジフ1996：85-6）

エスニシティ概念が使われる時、初めはその客観的な特徴が取り上げられた。エスニック集団が、社会の小集団として実体を持つものと見なされたからである。移民初期の同胞の相互扶助、近隣コミュニティでの生活とそこで育つ子ども達に注目すると、確かに目に見える集団である。移民世代やその子ども達の文化的同化、偏見・差別の対象としての移民の問題がエスニシティと関連づけて研究された。

ところが、世代が進み、主流文化への同化を終えた後もエスニシティは残る。客観的定義だけではエスニシティは掴みきれなくなり、研究では主観的定義が注目されるようになった。主観的定義では、個人が自らあるいは他者の目で、あるエスニック集団に属しているとみなされる。エスニック集団そのものは、実体のあるコミュニティである必要がない。またイサジフは、エスニシティが日常生活の中で交渉の上で形成されるものであると述べている。(Isajiw 1999:33) つまり、エスニシティは個人と他者との相互作用の過程で形成される。

エスニシティのもう一つの特徴はそれが固定的なものではないことである。竹沢はエスニシティ概念の特徴を次のように指摘している。「・・・静的な概念で帰属がほぼ生得的に決定される民族と異なり、エスニシティの概念では相互作用の重視によりたえず変化する境界とそれによって規定されるエスニック集団を動態的に捉えることが可能なのである」(竹沢 1994:14)

本研究が対象とする日系移民世代は、戦前はエスニック集団としての実体を持ち合わせていた。多くが移民コミュニティに集住し、日本町もあった。客観的アプローチで把握できる部分は多々存在し、研究なされてきたが、ここに異なる視点、主観的アプローチを加えたい。移民の二世代目以降に見られる文化的同化の後のエスニシティは、主観的定義を用いて分析されているが、移民世代は言語などの文化的特徴から「日本人」であると扱われやすい。しかし移民世代は移民前の日本人のままではない。カナダの日本人移民は日本の日本人とは異なる経験をする。カナダの生活様式を取り入れ、白人との接触では自分が彼らとは異なることを気付かせられる。自分が何者であるか、何者であるべきかを意識せざるを得ない。移民世代のエスニシティはカナダ社会で形成される。

イサジフは、客観的定義と主観的定義を組み合わせ、さらに地域を限定し、北アメリカにおけるエスニシティを以下のように定義している。「エスニシティとは・・・同一の文化を共有する人びとの非自発的集団、あるいは同一の非自発的集団に属すると自ら同定している、そして／あるいは他者によって同定されている人びとの子孫」（イサジフ 1996：93）。本研究ではイサジフのエスニシティの定義を基に、それが他者との相互作用によって形成される動態的なものであることを前提にする。

2.2　日系カナダ人概要

本研究では日系カナダ人とはカナダに永住する日系人を指す。カナダ国籍の有無は問わない。日系人は日本からの移民あるいはその子孫を指す。

カナダの日系人には移民の時代によって二つの流れがある。第二次世界大戦前の移民と戦後の移民で

ある。彼らは特徴が異なる。異なる時代の日本からカナダに渡り、カナダで異なる歴史社会体験をした。特にカナダ社会に根強かった戦前の日本人への偏見・差別は戦後大幅に軽減された。以下、戦前の移民について、Ken Adachi の文献を元に概略を述べる。

戦前の移民は１９世紀末から２０世紀初頭にかけて大量にカナダに渡り、ほとんどが西海岸のブリティッシュ・コロンビア州に住んだ。多くは出稼ぎが目的の男性で、漁業、林業、鉱業、農業に従事した。日本人移民が増えるにつれて、白人の間に排日感情が生まれた。カナダ政府は 1908 年からは日本からの男性移民を制限するようになった。これ以降この制限に含まれなかった女性の大量移民が 1928 年まで続く。この時代に二世が生まれる。ブリティッシュ・コロンビア州の排日法により、日系人は帰化した者も、カナダ生まれの二世も選挙権を得られず、職業制限もあった。戦前からの日系人差別は 1941 年 12 月の真珠湾攻撃でピークを迎えた。日系人はカナダ市民権の有無に関わらず敵性外国人と見なされ、1942 年 2 月西海岸に住む２万１千名に強制移動令が出され、内陸部へ移動させられ、私有財産は没収された。日系人は収容所、道路キャンプ、戦争捕虜収容所、砂糖大根農場の他、東部への移動、日本への送還と西海岸からは追放された。日系人への差別は終戦後も続き、日系人が連邦選挙権を得たのは 1948 年、そして完全な移動の自由を得たのは 1949 年のことである。

2.3　日系カナダ人研究

日系カナダ人については、カナダでの被差別体験、文化変容、多文化主義政策、戦時強制移動の補償問題、日加関係などのトピックと合わせて、歴史社会の分野で研究されてきた（Adachi1976; Sunahara 1981; 新保 1996 ; 飯野 1997）。本研究はその土台の上に日系エスニシティの視点を加える。

3　資料

Mitsuru Shinpo Collection, Japanese Canadian Research Collection XXXVIII. B. Interviews (J), Special Collections and University Archives Division, University of British Columbia Library

本研究では上記資料を使用した。カナダに戦前移民した日系移民世代のインタビュー記録である。この資料について説明する前に、この資料に辿り着くきっかけとなった別の資料について説明する。

著者は 1999 年カナダのアルバータ大学で古い調査票回答が入っている箱の存在を知る。処分されることになっていたその箱には、名前が書いてあったので、持ち主であった社会学部名誉教授ゴードン・ヒラバヤシ氏に確認し、調査票回答を譲り受ける。その回答は日系カナダ人を対象としたプロジェクトの準備調査のものであったが、そのプロジェクトは完成しなかった。

サンプルの偏り、回答数の少なさ（70）、そして記述の少なさから、分析は困難であった。資料は長年手つかずのままであったが、近年、調べ直したところ、準備調査票にある回答者名は、別に存在するインタビュー記録の回答者名と大部分が重なり、そのインタビュー記録がカナダ・ブリティッシュ・コロンビア大学図書館に保管されていることがわかった。準備調査票とインタビュー記録の回答者が揃っているものが 61、準備調査票のみの回答が 5、インタビューのみの回答が 4 である。

この二種類の資料は形式が異なるだけでない。内容にも違いがある。準備調査票は多肢選択式を中心とし、記述は少ない。インタビューの筆記記録には準備調査票の回答と同一内容の部分もあるが、調査票の項目とは別に、詳細に回答者本人の語りを記録している。回答者の中には自ら調査員の S 氏宛に手紙を書き送っている者もいる（資料 XXXVIII.B.1）。

以下、調査に関わったゴードン・ヒラバヤシ氏（調査票資料について書く時にはその出所については明記するようにと、生前指示があったので名前を出す）と調査に助手として関わった N 氏からの情報を整理する。ヒラバヤシ氏との面談は１９９９年と２００１年に行った。N 氏にはエドモントン日系協会を通して連絡を取り、N 氏からは２０１６年６月にメールで回答を得た。

3.1　準備調査票

準備調査票は１セット９ページからなる。タイトルは The Preliminary Survey of the Japanese Canadians Part I Issei Questionnaire である。

調査票は英語で作成されているが、選択肢以外の部分の記述は日本語である。一世とのインタビューが日本語で行われたからであろう。調査は 1971 年夏と 1972 年夏を中心に行われ、回答は 70 ある。他

に二世を対象とした調査票の見本が一部あるが、回答は見つかっていない。当初はカナダの日系人一世と二世を対象に広く調査を行う予定であったようだ。質問項目は１から 62 まである。本人の性別、年齢。移民前の情報として出身地、移民の動機、定住の意思とその理由。渡加した時代と経由地。学歴、カナダでの学歴、英語力、宗教、購読紙、ラジオの所有、英語力。暮らしたコミュニティ、職業、住居については、移民時、1941 年以降、1947 年以降、現在に分けて尋ねている。親、親戚との同居。本人の父親と配偶者に関する質問、子供の数、親戚とのコンタクトに関する質問もある。

この質問事項からは、移民世代を文化集団として捉えていたことが推測できる。回答からは文化変容や社会経済的地位、社会移動を測ることは可能だろう。回答者は日本生まれの一世であるが、親がカナダにいたという者が 21 ある。先に渡加した親の呼び寄せであろう。

3.2　調査と資料

当時調査に関わったのはアルバータ大学社会学部のゴードン・ヒラバヤシ氏、ブリティッシュ・コロンビア大学社会学部で博士号を取得したばかりの S 氏、そしてアルバータ大学理学部の学生であった N 氏である。ヒラバヤシ氏はカナダ在住日系アメリカ人二世である。S 氏は満州生まれ、日本帰国者でカナダへの戦後の移住者。N 氏は戦後の日本からの留学生である。

誰が中心になって、プロジェクトを始めたのかは不明であるが、同じ箱に入っていた二世対象の調査のパイロット・スタディー見本がアルバータ大学社会学部作成になっているので、当時アルバータ大学社会学部教授であったヒラバヤシ氏が日系カナダ人を対象に調査を試みたと考えてよいだろう。しかし、一世へのインタビューは日本語で行われたので、実際のインタビューは日本語を自由に操る事ができる S 氏と N 氏が行った。以下、N 氏のメール回答による。

N 氏は夏にアルバイトとして S 氏と聞き取りの行動を共にした。ある時は N 氏が一人で行動した。ヒラバヤシ氏が何をしていたかは知らない。２年目（1972 年）に、ヒラバヤシ氏からエドモントンでアンケート調査を頼まれて、少しした。調査の時にはアンケートも使ったが、S 氏の場合、アンケート用紙はあくまで基礎的な情報のみ。アンケートの後、本音を聞き出すのが目的だった。ヒラバヤシ氏がアンケート調査から結果を導こうとしたのに対して、S 氏と N 氏は疑問を持っていた。

ヒラバヤシ氏も S 氏も亡くなった今、その詳細を知る事はできないが、プロジェクトは初期段階で終了した。その後、調査票はヒラバヤシ氏の元に、別紙インタビューの記録は S 氏の元に残ったようである。そしてそのインタビュー記録が、現在 Mitsuru Shinpo Collection XXXVIII.B として UBC 図書館に保存されている。

N 氏は社会学部のプロジェクトの当初の目的について、ヒラバヤシ氏の目的は正確には知らなかったとし、次のように述べた。

目的は差別を受けた人間がどのように行動するか。差別は何のようなところから（動機等）出て来るのか。何故日系人はまとまって生活、仕事をしたのか。差別をする側の動機までかいま見る事が出来ました。調査の焦点は「差別」でした。（N 氏からのメール）

N 氏は助手として S 氏と共に行動したので、これは S 氏の目的と読んでいいだろう。

3.3　調査が行われた時代

インタビューは1971年夏と1972年夏に行われた。この時代、アメリカの公民権運動の影響を受け、カナダでも、1960 年代から多文化主義運動が本格化し、マイノリティの権利主張の声が大きくなっていた。エスニック文化の再活性化や歴史掘り起こしが活発になった（浦田 2004:51, 57-9）。しかし、他エスニック集団とは異なり、1970 年代に入っても、多くの日系人は表立って日系であることを主張していなかった。戦時までの差別体験が日系人に影響を残し、一世と二世は同化に努めていた。そして多くの三世は一世と二世の歴史体験を聞かされなかった。政府の多文化主義政策に後押しされるように、日系人の活動が表に出てくるのは 1977 年の日系百年祭の準備のためである（浦田 2004:60-1）。

インタビューでは当時すでに高齢であった移民世代が、２０世紀初頭の自らの移民当時から戦時強制移動までの過去を振り返って語っている。

4　移民世代の語り

インタビュー記録には番号があるものとないもの

があるが、準備調査票には１から 70 まで整理番号が揃っている。番号がないものには、名前を確認し、準備調査票のあるものは、その整理番号を使用する。

「　」はインタビュー回答事例　（　）は準備調査票の整理番号またはインタビュー記号　＜＞は著者注またはコメント

ここでの目的は日系エスニシティの形成プロセスにミクロの視点で近づくことである。一世の語りから一部抜粋し、日系エスニシティの特徴とその形成と関わる可能性のある要素はないか探索する。資料の語りの分析において、手始めに日系人研究あるいはエスニシティ研究で扱われてきたいくつかの要素で分類する。事例は平均的あるいは典型的なものとは限らない。むしろ、少数であっても、異なる傾向の回答を取り上げ、移民世代の中の多様性を集団の中に埋もれさせないようにした。まさに、その内部のぶつかり合いや、リーダーの外部との交渉が、内からと外からの日系エスニシティ形成に影響を与えるからである。

4.1　渡加の理由

「１９０６年畝傍中学（奈良県）卒業。士官候補試験を受けたが体格検査で不合格。カナダでレストランを経営するつもりだった」（１）＜不合格を乗り越え、新たな成功の機会のための移民＞

「１９０６年友人がハワイにいたので自分も出た。当時カナダに移民が入れたのでカナダに来た」（２）＜友人を追って移民＞

「徴兵検査を逃れるため呼び寄せで来た。英語の勉強をして成功して市会議員にでもなるつもりで来た」（５）＜徴兵逃れの手段。（１）と同様に成功する夢をもって＞

「ミカンなどの貿易をしていた」（１０）＜日本からの輸出でカナダと取引があった＞

「１９１９年東京師範卒業。スティーブストンの日本語学校で朝から日本と同じように日本語学校で教えていた」（１４）＜日本語学校教員＞

「１９２０年スティーブストン漁業組合附属病院に呼ばれて来た。東大附属病院産科教室卒業」（１５）＜産婆＞

「東京師範卒。１９１７年 Vancouver 共立学校より招聘されて来る」（２３）＜日本語学校教員＞

4.2　州政府、連邦政府による差別

「漁業権削減」（１１）

「戦争が始まったその日に R.C.M.P. がひっぱりに来た」（１４）

4.3　凝集

・原初的愛着、相互扶助

「１９２０年エドモントンへ来る。理髪店を開く。家は下が理髪店で上が貸部屋。部屋には炭坑から出て来る独身の日本人が泊まった。独身日本人に食事を与えたり、小遣いをやったりした」（２）＜日本人に部屋の賃貸関係だけではなく同胞意識があった＞

「（写真屋の）使用人は白人ばかり。外交員に日本人のところへ行かないように言った。他の日本人の写真屋がもうかるようにと思った」（５）＜日本人が経営者で白人を使用した。他の日本人写真屋と競争しないよう調整した＞

・宗教

「元々仏教であったが、キリスト教にかわり、戦後奥さんがきてからはまた仏教」（６）

「家族は真言宗、妻は禅宗、しかし今は皆キリスト教合同教会」（１０）

「昔は仏教会に行ったが、子供が（キリスト教）教会に行くので、自分たちも教会に行くようになった。仏教もキリスト教も同じ」（１８）＜６、１０、１８共に特定の宗教には執着がみられない＞

・学校

「長男が小学生の頃、四家族が集まって・・・子供に栗本先生より日本語を習ったが長続きしなかった」

（２）＜日本人が少ない内陸部のアルバータ州エドモントン。親が日本語学習の機会を作った＞

「１９２０年代日本語教育会を作り１９４１年まで続いた。内容は同化の問題、学童隔離問題など」（１４）＜同化するべきかどうか、子供の教育をどうするかという問題に取り組んだ＞

「当時日本人会県人会は重要で、英語の出来ない人に職、住、娯楽などの世話をした。日本人会は福利増進で、収入は会費と領事館の一部の仕事を手伝い、金を入れた。子供の籍の届け、不公平な待遇に対する団結、生活の改善等が目的だった」（２３）＜同胞、同郷者が生活面でつながっていた。日本人会は領事館の仕事をした＞

「＜学校では＞自分の時には伝統を重んじ、日本の精神を持った良きカナダ人として育てた・・・自分は子供中心で教育で日加を結びつけようと思った」（２３）＜日本語学校での教育。同化すなわちカナダ人ではない＞

4.4　分離分裂

・日系人間競争

「仕事を取りに行っても古い日本人が全て取ってしまい、なかった。それで中国人のところに行って仕事をした」（３）＜日本人同士相互扶助とは限らない＞

「＜鑑札漁業ライセンスの書類ミスを＞ある日本人が密告した。＜密告をした＞この人の言い分は、自分は食べるのに精一杯なのに、木村のように気楽に暮らしているのはけしからん・・・この人は少し英語が出来たので、２０人の人から一人$200 で鑑札をもらってきてやると言って、もらって来た」（１１）＜日本人相手の商売＞

「日本から中学を出てきた人はいばっていて日本人を排斥した」（３）＜学歴による日系内部の差別＞

「＜戦時中＞元インテリはいじめられたりして苦しかった」（２３）＜日本語学校教師。学校では日本人の精神を説いたが戦時は無力になった＞

・ボス制度

「＜タシメでコミッションナーに言われて移った家に＞森井の下の大関の子分が怒鳴り込んできて、すぐに出て行かないと家を焼いてしまうと言われた・・・大関氏に会い、訳を聞きに行った・・・上代氏は自分たちの身代わりになって（捕虜収容所にいって）くれているのだから、十分に保護をすると言われたのにこれはいったいどういう訳なのか・・・後で聞く所によると、大関氏達を通さず、直接コミッショナーの言う通りにしたのが気に入らなかったらしい」（１５）＜ボスの存在＞

「７０年前＜１９００年頃＞日系人社会は教育も低く、英語も話せないので、少し話せる人を中心にボス制度だった」（１７）＜英語が権力の道具＞

・先に内陸にいた日本人とそこに立ち退きで西海岸から来た日本人

「移動した日本人に対し、元から居た日本人はいばり、元からいたある二世はゴースト・ジャップと言った」（５）＜ゴーストはコースト。西海岸の意。おそらく白人が言ったことを二世が真似した。移動させられた西海岸の日本人と以前から内陸部にいた日本人は異なる経験をした＞

「１９１０年に土地を買った。帰化した。Westbank には日本人は少なかった。戦前５人・・・・１９３０年頃は Vancouver の日本人が、夏　漁業、イチゴが終わってから、季節農夫として働きに来た・・・・日本人同士では遠慮があって、一番気が疲れた。待遇が悪いと日本人では気まずくなった。Vancouver の日本人はオーチャードの仕事に不慣れな人が多かった。真面目なのは真面目だった・・・コースト日本人はせかせかしてがめつかった。＜土地を買ったので＞Vancouver の日本人にねたまれた。敵意をもたれた。Vancouver の日本人は自分中心でいろんな誤解もあった」（２６）＜同胞であることが仕事上は扱いにくい原因にもなる。バンクーバーの日本人のステレオタイプが表現されている＞

4.5　他集団の一員との接触

・差別

「プリンス・ルパート＜漁夫多数＞では排日運動はあ

った」（１）

「排斥はイタリア人がされ、イタリア人は日本人を排斥した」（３）＜白人の中でもイタリア人は差別された。差別の連鎖＞

「日本人は白人に対し反感があり、一方でへつらいの気持ちがあった」（５）＜劣等感＞

「学校に排斥はなかったが、一般に排斥が強かった」（１４）

「＜賃金は＞排日で白人より安かった・・・＜雇い主＞エバンズはよく仕事をくれてペイは＜白人と＞同じ。しかしデリバリーには日本人を使わなかった。Neil は日本人を使っていたが、選挙の為に排日と言った・・・ロードキャンプ内で４月３０日天長節をやろうということになり、３０～４０人並んで君が代を歌った。副ホーマンが来たが、日本の King のバースデーだと言ったら、そうかと言っただけで何も言わなかった」（２４）＜賃金差別。仕事ぶりに満足しても、白人の反日感情を汲んで、配達、選挙では日本人を排除した。道路キャンプには日本国籍の男性が送られた。King は天皇 Emperor のこと。カナダの元首は英国王＞

「＜戦中＞キャムループス郊外へ自由移動。戦中、個人対個人では排斥はあまりなかったが、空気は排斥的だった・・・・白人は日本人と中国人を同等に見ていた」（３７）＜個人関係と社会風潮は違う。アジア系として同じ範疇＞

「昔白人はえらいと思っていた」（b）＜白人の日本人に対する偏見を受入れ＞

・交流、交渉

「＜戦時中移動で＞リルエットに行く時、知人から紹介状をもらった。Mr. Fare は排日の親玉。＜訪問すると＞座れとも言わなかった。キャンベル＜知人＞からの紹介状を読むと態度が変わり、町へ来たら寄ってくれ・・・写真を焼いてくれ・・・上手だと・・・自分の山の木を切って薪をつくってもよい・・・その内、自分から日本人村に来た」（５）＜偏見が信頼に変わる＞

「〈日系商会で塩鮭と塩鰊を輸出〉1932 年当時はカナダの中国人にも反日感が強く・・・中国人の妨害も多かった・・・そこで中国人代表に会って、有色人種は互いに助け合うべきで、団結すべきだと交渉に行った・・・中国側は受け入れて、日系、中国系は協同組合を作った・・・＜Neil 連邦議員の日系漁業権削減法案に抗議して＞漁業長官に頼みに行ったところ、商店と日系人の関係を結べ・・・日系人がいると地元の商店はもうかるはずだから地元民に署名してもらうよう言った・・・」（１１）＜出身国の関係が移民に影響。移民先社会での新たな関係を作る。ビジネスでの協力。地域住民との関係。漁業組合リーダーの外部への働き＞

「（開戦で）捕まった（捕虜収容所に送られた）連中が集まって委員会を作り、選挙で委員長を選出・・・（委員長は）貿易商で英語がよく出来た。委員長と Dr. 掘（UBC 卒業二世）を通じ、色々な交渉をした・・・（捕虜交換船で）1943 年９月 10 日ニューヨークからゴア。ここまでスペイン船。ゴアから日本船。合計６３人がカナダから乗り、途中メキシコ、U.S.A.、ペルー、ブラジルからも乗る人があり合計 1600 人。船の中で選挙・・・事務所長にはアメリカからの帰りの二井氏、副所長に上代... ブラジルからの若い人たちは乱暴で開教師がプールにほうりこまれたりした」（１４）＜捕虜収容所で民主的運営を交渉。異なる国に移民した日系が同じ船に＞

「1941 年主人（１４）が捕まえられた。ラジオを中国人の親友にあずけた。中国人が食料品を差し入れてくれた」（１５）＜他エスニック集団の成員との友人関係＞

・同化

「ミス・レノックスは日本人の地位を上げる為、骨を折り、白人社会の中に連れて行き、服装等にまで恥をかかないよう教えてくれた。二世に対し、幼稚園、日曜学校を開いた」（１）＜同化のため手助けする白人。キリスト教関係者＞

「１９３６年から４１年まで日本人で赤い羽根運動をした。理由は当時日系人はカナダの社会におけるこのような運動には無関心で寄付をしなかった。しかし、病人等はカナダの社会の福祉を受けているの

で日本人も参加すべきだと思った」（１０）＜カナダ社会の価値観に同化＞

5　おわりに

移民個人が置かれた状況と他者との相互作用に注目して、日系エスニシティ形成の過程が明らかにできないか試みた。現段階で気付いた事を記す。

この資料のインタビューの回答者の中には、かつての日系コミュニティのリーダーであったことが伺える例がある。外部との交渉などに骨を折っている。その語りは典型的な／平均的な／多数の声であるとは言えない。女性にいたっては、インタビュー回答者の中にわずか２名しかいない（準備調査票では５）。移民コミュニティでの女性の役割が見えない。

このように偏ったデータではあるが、回答者の語りは、彼らの経験を生き生きと伝える。事情で日本を離れ、カナダでの成功を夢見て来た者には、出稼ぎという言葉では見逃しがちな、新天地でセカンド・チャンスにかけるかつての若者の姿が見える。

これまでの日系カナダ人研究でも指摘されたように、外部からの差別と内部の相互扶助は戦前の日系エスニシティ形成にとって見逃せない要素である。ただし、同胞としての助け合いには権力関係が見える。ボスと呼ばれる親分（やくざとの指摘もある）が弱者の面倒を見る。逆らえない関係である。英語ができる者が手数料を取って、漁業ライセンスなどの手続きをする。日本人会が領事館の出先の役割をする。先に移民した日系が後から来た日系を助けたわけではない例もあった。助け合いはボランティアではなかったようだ。

資料には日系内部の多様性が見いだせる。例えば、西海岸の日系と内陸の日系の特徴が異なることが指摘されている。これは漁業と農業、あるいは都市生活者と農家の違いかもしれない。彼らは異なることを相互に指摘している。

カナダで生きて行く日系人がどうあるべきかという日系エスニシティへの主体的態度の存在が浮かび上がった。日本語教育会では同化の問題が取り上げられている。元教師が日本語学校で日本人の精神でよきカナダ人になることを教えたという証言は、二世が置かれた複雑な状況を示している。

差別に甘んじるのではなく、カナダの白人と交渉したり、ビジネス関係の構築に他エスニック集団である中国人と交渉、協力する様子も見られた。

本稿ではエスニシティの視点で資料を分析した。因果関係の説明に関しては、今後の課題とする。

参考文献

・一次資料

Mitsuru Shinpo Collection, Japanese Canadian Research Collection XXXVIII. B. Interviews (J), Special Collections and University Archives Division, University of British Columbia Library

The Preliminary Survey of the Japanese Canadians　Part I　Issei Questionnaire　（回答）

ゴードン・ヒラバヤシ氏との面談１９９９年８月；２００１年８月

N 氏から著者へのメール回答２０１６年６月３０日

・二次資料

Adachi, Ken. 1976. *The Enemy That Never Was: A History of the Japanese Canadians.* Toronto: McClelland & Stewart.

Isajiw, Wsevolod W.　1999.　*Understanding Diversity: Ethnicity and Race in the Canadian Context.*　Toronto: Thompson Educational Publishing, Inc.

Nabata, Terry.　1975. “An Inventory to the Papers and Records in the Japanese Canadian Research Collection.” Special Collections and University Archives Division. Universisty of British Columbia Library.　Revised by Norman Amor 1996.

Sunahara, Anne Gomer. 1981.　*The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians during the Second World War.*　Toronto:　James Lorimer & Company.

飯野正子　1997『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会

イサジフ、ゼボルドW.　「さまざまなエスニシティ定義」青柳まちこ編・監訳　1996『「エスニック」とは何か：エスニシティ基本論文選』新泉社　73-96。

浦田葉子「絆のネットワーク：ニュースレター『もしもし(Moshi Moshi)』によるカナダのエスニック・コミュニティ形成」田中きく代・高木（北山）眞理子　北米エスニシティ研究会編著　2004『北アメリカ社会を眺めて−−女性軸とエスニシティ軸の交差点から−−』　関西学院大学出版会　51-71。

新保満　1996『石をもて追わるるごとく：日系カナダ人社会史』お茶の水書房

竹沢泰子　1994『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』東京大学出版会

（原稿受理年月日　2016 年 12 月 9 日）